

毎日の授業や生徒との接し方に悩む若い先生たち、こんな小さなきっかけから生徒が変わります。

問われる教師力 2

先号では、「問われる教師力」と題し、「授業づくり」においては、学習者ウォッチング力、自家薬籠中のものとしての育てたい力の一覧表をもつこと、学習材候補から学習材にする力、育てたい力と学習材、学習活動（言語活動）と学習形態の組み合わせ方が問われるだろうということ述べた。今号では、学習指導展開中に問われる教師力を中心に述べる。

1 学習指導展開中に問われる教師力

一つの単元が始まると、指導者は教室という状況の中でさまざまな力を駆使してフル回転しなければならなくなる。学習者を動かして学習を進めながら、個々の学習者、また学習者集団の動きや反応、さらに全体の流れを見、それぞれに対応させながら授業を展開させていく。授業全体を評価しながら進めていくといつてよい。どこをどう見るか、チェックポイントを挙げてみよう。

(1) 授業が始まってすぐの場面

- ・ 学習者の学習材に対する反応―食いつきはよいか。どの程度の興味を示しているか。興味は継続できそうか。
- ・ 学習材と言語活動が合っているか。その言語活動で育てたい力はつけられそうか。
- ・ 指導者の発話・発問、指示は学習者に伝わっているか。有効にはたらいっているか。

(2) 授業の中ほど

- ・ 単元全体、または単位時間の学習の総体的評価（成果や問題点）。学習材の適不適。複数教材（学習材）の必要性の有無。学習形態が個々の学習者にとってどのような影響をもたらしたか。
- ・ 声の出し方、発音、滑舌。
- ・ 音読、朗読、できれば節をつけて歌えること。
- ・ 文字（毛筆・硬筆・板書）を示範できること。
- ・ 表記法、原稿用紙の使い方。
- ・ モデルとなるようなスピーチ（短話）が作れること。
- ・ モデルとなるような文章（詩、短歌、俳句、エッセイ、創作など）が書けること。
- ・ 演技、演劇に関する知識。

2 プロとしての教師力

国語教師もプロとして身につけていなければならないモノがある。それは学習者にとってはモデルであり目標である。どのような力・技なのか、羅列してみよう。

(1) プロとしての基礎力

- ・ 声の出し方、発音、滑舌。
- ・ 音読、朗読、できれば節をつけて歌えること。
- ・ 文字（毛筆・硬筆・板書）を示範できること。
- ・ 表記法、原稿用紙の使い方。
- ・ モデルとなるようなスピーチ（短話）が作れること。
- ・ モデルとなるような文章（詩、短歌、俳句、エッセイ、創作など）が書けること。
- ・ 演技、演劇に関する知識。

(2) プロとしての知識・技能

- ・ 話し合いのやり方、させ方。
- ・ ワークシートの作り方。
- ・ 「学習の手引き」の作り方。
- ・ 辞書に関する知識。
- ・ パフォーマンス（立ち位置、時間配分、TTTや招待

「学習の手引き」は、個々の学習者に対して有効にはたらいっているか。

- ・ モデル提示（指導者や級友、先輩がモデル）は有効適切であったか。
- ・ 学習者につまずき、停滞はないか。だれがどういうことに対してつまずき、停滞しているか。学習者のそれまでにつけたはずの能力の欠落部分、不十分な点はないか。

学習材と学習活動によって学習が成立している（熱中している）か。言葉の力は確実につけられているか。学習材の適不適の判断と、新たな学習材投入の必要性の有無の判断。

- ・ 学力が不足して練習の必要性を感じるか。方法を変えて練習をしたほうがよいという決断はあるか。
- ・ 学習形態は適切か。特に、話し合い（学び合い）学習で、ペアがよいかグループがよいかの判断、書く活動との組み合わせ、書く時間の確保は取られているか。
- ・ 学習の継続は可能かどうかの判断。

(3) 授業の終わりのほう

- ・ 単元の学習目標を確かめて学習が進められたか。かけた時間は適量であったか（振り返り記録などにより）。
- ・ 個人差に応じる学習内容であったか。個人差に応じた指導ができたか。学習者個々の学習に対する満足度、成就感、出してきた疑問などをつぶさにとらえ

講師との連携など。

- ・ ICT教育に関する知識、道具の使い方。
- ・ 情報の獲得、保管、利用技術、カード使用など。
- ・ 学習材候補の収集と学習材化力。

3 学校全体に働きかける教師力

言うまでもないが、教師は自立した読書生活者であること、言語文化への関心と接触（演劇、落語、古典、古典芸能、さまざまなメディア）を人一倍心がけること、地域の文化や言語への関心を持ち接触を図ること、が必要である。新しい学習指導要領による新しい教育が始まれば、国語教師は他教科と連携を図りながら、学校全体の国語教育の推進者となっていかなければならない。教科だけに閉じこもることは許されないと、肝に銘じていただきたい。

4 最終回にあたって

国語教室運営にあたっての小さな疑問、大きな声では聞けない教室での身の処し方、そんな声に応じようと始めたのがこのコラムでした。平成十五年のことです。今回53、54号で「教師力」として総括してみました。一つひとつの項目は具体的な授業の中で、指導者、学習者、学習材、学習活動とのかかわりをとらえるべきものです。まず、自分が授業研究をする。そして他人の授業研究に多く参加し、話し合い、学び合う。「教師力」につながる唯一の道と信じます。

（元岐阜大学教授）

